

哲学とアートのための12の対話——『現代』を問う

第11回：「専門家やプロは信用できない？」

2024年2月10日（土）14:00 京都芸術センター大広間

「専門家」はいつ誕生したのか？

広い意味では、文明の始まりから何らかの「専門家」は存在していた。それは当然である。狩猟採取の時代にも、狩の技術や道具の製作に長けていた人々はいただろうし、人間に有益な植物や鉱物、その利用法について深い知識を持っていた人もいたことだろう。また、呪術や宗教的儀礼を執り行っていた人間も、ある種の専門家と言えるかもしれない。

けれども今日の対話で取り上げたいのは、たんに〈特定の領域において優れた能力を持つ人間〉という一般的な意味での専門家ではなく、近代的な意味における専門家である。近代における専門家とは、制度化された教育や訓練を修了し、学位などの公的に認定された資格を持ち、専門家でない人間には許されていない何らかの処置、操作、決定といったことが行える人のことである。たんに特定領域の深い知識や高い技能を持つだけでなく、ひと言でいうなら、そうした存在であるという「権威」を有する人のことだ。

権威に惑わされてはいけない、などと権威自体を悪であるかのように考える人がいるが、社会にとって権威は必要である。近代以前にももちろん権威は機能していた。権威とは、何か正しいことを証明なしに通用させる力のことである。私たちはこの世の全ての事柄について、自ら証明し確認して判断することはできない。私たちが世界について行なう判断のほとんどは何らかの権威に基づいている。しかし権威とは「力」であるから、政治的に利用することも可能である。

近代以前の権威は神に由来するものであった。それからすると近代とは、権威が世俗化され、法律等の制度と結合し、国家機構の中に組み込まれたことを意味する。また権威は社会的コミュニケーションを通じて伝達されるが、19世紀から20世紀に入るとマスメディアが急速に拡大し、権威を伝達する最大の媒体となった。

近代的な意味での「専門家」はいつ誕生したか。それは19世紀ヨーロッパで生まれた。それ以前には存在しない。その典型は「科学者」である。いや、科学者は昔からいたのではないかと思われるかもしれない。万有引力を発見したアイザック・ニュートンは17世紀人だし、西洋医学の祖とされるヒポクラテスは古代ギリシア人である。

彼らを「科学者」と呼ぶのは間違いとは言えないが、それは後付けの解釈である。厳密に言えば彼らは現代の私たちが想像するような「科学者」ではない。私たちは彼らを、公的な認定（学位や資格、ノーベル賞などの世界的名声）によって尊重しているのではなく、端的にある知識の領域における、否定し難い歴史的貢献によって認めているからである。

そもそも「科学者」という言葉自体が、ある時代以前には存在しない。「科学者」という言葉は英語（scientist）で、それがはじめて使われた時点は分かっている。それは1833年で、この言葉を造語したのはウィリアム・ヒューエルというイギリス人だ。この人は何者か？ 彼自身は今の意味での「科学者」ではなく、“polymath”と呼ばれる人物である。これは「博識家」というか、科学者、科学史家、哲学者、牧師で神学者でもあるという、現代人にとってはちょっとピンと来ない肩書きなのだが、当時としては知識人として珍しくない在り方だった。



William Whewell (1794-1866) was an English polymath, scientist, Anglican priest, philosopher, theologian, and historian of science. He was Master at Trinity College, Cambridge. In his time as a student there, he achieved distinction in both poetry and mathematics.

The breadth of Whewell's endeavours is his most remarkable feature. In a time of increasing specialization, Whewell belonged in an earlier era when natural philosophers investigated widely. He published work in mechanics, physics, geology, astronomy, and economics, while also composing poetry, writing a Bridgewater Treatise, translating the works of Goethe, and writing sermons and theological tracts. In mathematics, Whewell introduced what is now called the Whewell equation, defining the shape of a curve without reference to an arbitrarily chosen coordinate system. He also organized thousands of volunteers

internationally to study ocean tides, in what is now considered one of the first citizen science projects. He received the Royal Medal for this work in 1837.

One of Whewell's greatest gifts to science was his word-smithing. He corresponded with many in his field and helped them come up with neologisms for their discoveries. Whewell coined, among other terms, **scientist, physicist, linguistics, consilience, catastrophism, uniformitarianism, and astigmatism**; he suggested to Michael Faraday the terms **electrode, ion, dielectric, anode, and cathode**.

(Wikipedia 英語版)

「専門家」はなぜ信用できないのか？

このように「科学者（サイエンティスト）」は19世紀に作られた造語だが、「科学（サイエンス）」はきわめて古い概念である。サイエンスの語源はラテン語のスキエンティア（scientia）で、これは多少とも組織化された知識一般を意味する。英語のサイエンスにはまだこの意味が残っており、その場合はサイエンスを「科学」と訳すのは適切ではない。「知」あるいは「学知」（どちらも好きな言葉ではないが）と訳すべきだろう。サイエンスの訳語としての日本語の「科学」には、こうした広い意味はもはや残っていない。

ヒューエルの時代には、様々な知識が本来相互に関係しあっていて特定の専門領域だけで完結するものでないことは常識であった。だから詩作すること、神学論文を書くこと、数学、機械工学、物理学、天文学の研究をすること、ゲーテの詩を翻訳すること、などは互いに結びついて「知」の全体を形成する。たんにバラバラにいろんなことができた多才の人だったわけではない。19世紀前半までは、特定分野のことしか分からないというのは知識人として異常なタイプであり、あまり尊敬もされなかったと思う。そんな時代に生きたポリマスであるヒューエルが、同時に現代の専門主義に結びつく「科学者」という語を造ったのはある意味皮肉なことだ。

今日でも優れた科学者や研究者においては「知」の全体性という認識が活きている。それはそうした人の話や書くものをみれば分かるけれども、制度的にはまったく重要視されない。大学の人事などにもほとんど考慮の対象にならない。表向きには「専門家」であることだけがリスpektされる。大学にはかつて「知」の全体性を志向する「教養」という概念があった。けれども1990年代以降の大学「改革」によって滅ぼされてしまった。まるで「教養」自体が一種の「既得権益」であるかのように、教養部は解体され教養教育は軽視され弱体化されてきた。そうした教育の中で育つ「専門家」は、「知」の全体性なんて科学が未発達な過去の遺物であるかのように嘲笑う、そういう価値観を植え付けられることになる。

私たちに身近な「専門家」の例で言えば、そのいちばん分かりやすいのは医師だろう。医師は本来、人間の身体、健康、幸福について全体的知見を持つべき存在である。だから当然「知」の全体性を意識しないわけにはいかないし、そうした全体的知識を備えた医師はリスペクトされた。けれども現代の価値観では、総合医よりも専門医の方が尊重される。私は母が亡くなる数年前、ある病院の内科に付き添った時に悪性腫瘍の可能性を指摘され開腹手術を勧められた。その腫瘍が悪性だとして、命に関わるようになるのはいつ頃ですか？と訊くと、まあ90代後半以降でしようなどと平然と答えたので正直私は驚愕した。その人は腫瘍の専門家で優れた内科医だということだったが、100歳頃に起きるかもしれないリスクと、80歳の老人が開腹手術されるダメージとを比較考量することができないのである（幸い同じ病院で受診していた整形外科医にその話をしたら「内科医長である専門医の判断に背くことは言いにくいだが、もし私の母親だったら絶対に手術させません」と言ったので安心した）。

(以上は書き下ろし)

ところで、愛はあるのか？

年下の友人から聞いた話である。彼は学生時代、なんとなく好きと思っていた同級生の女子がいた。その子の方も、自分を嫌っているようには見えなかった。それで、二人きりになったある時、彼は彼女にキスをした。ふつうだったらまあ、ロマンチックな場面といえる。だが娘は向き直って彼の方をまっすぐに見つめ、こう言い放った。「ところで、愛はあるのか？」

すばらしい。まるで、よく出来た韓国映画の一場面のような。この話を聴いてぼくは、ほとんど嫉妬に近い感情（誰に対してだろう？）すら抱いた。「ところで、愛はあるのか？」。今の世に対象は何であれ、どれほどの人がこの問いを、かくもストレートに発することができるだろうか？

さて、人の恋バナをネタにして偉そうなことばかり言ってるのは卑怯でなので、自分の恥ずかしい思春期も告白する。中学3年のクラスに美人でちょっと早熟な女子がいた。父が共産党員で、彼女は民主青年同盟で、そしてクリスチャンだった。クラスで回覧している日誌みたいなノートに、彼女が自分でそう書いたのである。それを読んでぼくは、共産主義者がキリスト教徒であるのはおかしい、「宗教は民衆の阿片である」とマルクスは言ったのだから、共産主義者は無神論者でなければならない、と書いた。

無粋なことである。でもそれがきっかけになって彼女はぼくと話すようになり、ある時「愛とは何か？」という話になった（こんなことを男女で話題にするだけで、昔はドキドキだった）。彼女はぼくの知らなかった一冊の本を取り出し、「愛するとは、その人のために死ぬることだ」という議論で、ぼくを説得しようとした。その本とは、ベストセラーとなった曾野綾子のエッセイ『誰のために愛するか』（1970年）である。

そう言われてぼくは「そうだね。きみのためなら死ぬるかも」などと即座にきり返すことはもちろんできなかった。むしろ、先の友人とはかなり違う文脈ではあるが、こんな「愛」の定義をいきなり目の前に突きつけられて、うるたえると同時に内心「ゲッ」と思ってしまったのである。その時から、何となく彼女への興味が失せてしまった。「愛」が、愛を遠ざけたのだ。若気の至りで、恥ずかしいことである。

たしかに「その人のために死ぬるか」では、愛と忠義の区別もつかない。しかし今思い返してみると、そうした定義にも一定の真理はあった。ある人（あるいは思想や物）のために自分の命を投げ出すということは、その対象の存在と自己の存在とを連動させるということである。そのこと自体は、たしかに愛の定義として間違っているわけではない。

今年（2012年）の6月、九州大学で行われた学会（美学会西部会）のシンポジウム「アートにおけるアマチュアリズム」に登壇した。そこで「アマチュア」とは何かという話をしたのだが、ぼくの話のポイントは、「プロフェッショナル」との対置で理解される「アマチュア」なんて、そうした対置が前提されている時点で、ほとんど議論に値しない、ということだった。

「アマチュア (amateur)」という英語は、イタリア語の「amatore」、遡ってはラテン語の「amator」に由来する。「愛する者」「愛好者」という意味である。重要なことは、それは決して「プロ」の対立概念ではなかったということである。というよりも、19世紀以前には、私たちが今日理解するような「プロ」という観念は存在しなかった。

「プロ」とは、ある活動を「仕事」として行う人のことである。その活動が「仕事」であるのは、それが何かしら個人を越えた存在——会社、国家、人類、etc.——の利益や進歩に寄与するとされているからである。「プロ」は真剣である。「プロ」の世界は厳しい。なぜなら「プロ」の仕事は愛によってではなく、競争原理によって動機づけられているからである。その結果「アマチュア」には、「プロ」には及ばないただの趣味的愛好者という、本来とは異なる意味が与えられた。

「プロ」という観念は産業革命と帝国主義の時代に生まれた。その典型は科学者であった。というより「科学者 (scientist)」という言葉自体、19世紀に発明されたものだ。その意味では、ガリレオもニュートンも科学者ではない。それどころかダーウィンだって、たぶん自分を「科学者」つまり「プロ」とは思っていない。では何かといえば、彼らはみんな、自然を研究する哲学者 (natural philosophers) である。彼らの探究は国家の利益や人類の進歩のためにではなく、知への愛 (philosophy) のために行われたからである。

19世紀とはひと言でいうと、男は「愛」なんて気楽なこと言ってちゃダメだよ、というのが常識になった時代である。できる男（および男と張り合える少数の女）は、「プロ」でないといけない。厳しい競争に勝ち抜くこと、国家や人類の進歩に寄与することが、共通の目標となった。科学技術はそうした価値感を表現する最適のモデルであり、それは今も続いている。その結果、芸術も科学技術のように、競争に勝ち、進歩し、誰かのためになるものでなければならなくなった。大災害が起こったりすると私たちがつい「この非常時において、アートに何ができるか」などと口走ってしまうのはそのためである。

NHKの人気番組に「プロフェッショナル 仕事の流儀」というのがあったが、ここに登場するのは科学者や実業家だけではなく、ありとあらゆる分野の「第一線」で活躍している人たちである。オープニングでスガシカオが「あと一歩だけ前に進もう」と歌うのだが、この主題歌のタイトルは「Progress」と言うのだ。こんな番組を多くの人が納得して観ているとすれば、それは進歩という強迫観念に冒されているのが実際に仕事に従事する人々だけではなく、現代に生きる私たち全員であることを示している。

「進歩」を「前進」と解すれば、それらすべての根底にあるのが「戦争」であることが容易に見てとれる。「プロ」の厳しさとは結局のところ、戦争の厳しさなのだ。テクノロジー、産業、ビジネス、教育、アート等々、あらゆる分野における「競争」を支配しているイメージは戦争のそれであり、だからこそ企業も行政も大学も、何か新しいことを提案するとき「〇〇戦略」という言葉をやたらに使いたがるのである。「第一線」というのも戦争用語だ。「プロ」たちは、よほど平和が嫌いなのだろうか。

「プロ」という観念が支配するこうした状況に対してただ文句を言っても、誰も本気では聞いてくれない。「プロ」を批判するには、批判する人自身が批評家という「プロ」である必要があり、こんな事を言っているばくにしたら、ただの理屈っぽいおじさんではなく大学教授という「プロ」であるからこそ、わずかでも耳を傾ける人がいるのである。もちろん、「プロ」より「アマチュア」の方が純粋であり、どんな事であれ本当の楽しさを知っているのだということには、「プロ」も同意するだろう。「プロ」はみずからの存在を心理的に補償してくれる「影」として、「アマチュア」を必要としているからである。それは「退職して趣味に生きる気楽な年金生活こそ本当の人生だ」と言っても誰も反対しないのと同じことだ。問題は、そうした「本当の人生」が——「本当」であるにもかかわらず——たんなるオマケとみなされ、世の中を動かさないということである。

アートであれ何であれ、私たちは「プロ」という強迫観念から当分逃れることはできないだろう。それは、この世界の根底にある「戦争」は、そう簡単に終わらないということの意味している。だが悲観していても仕方がない。私たちがないうる唯一のことはおそらく、容赦なく「前進」へと急ぎ立てられながらも、つねにこう問い続けることではないだろうか。「ところで、愛はあるのか？」

吉岡洋「ところで、愛はあるのか？」

(『有毒女子通信』第12号巻頭エッセイ ボイスギャラリー刊 2012年)